

開催報告

秋学期FDプログラム

「知識とスキルをアップデート『ChatGPT 基礎講座』—授業や課題での活用法—」

[2023年11月10日]

2023年11月10日にオンラインにて大学教育開発・支援センター主催の秋学期FDプログラム「知識とスキルをアップデート『ChatGPT 基礎講座』—授業や課題での活用法—」を開催しました。

今回のFDプログラムでは、春学期に続く生成系AIに関するFDプログラムの第2弾として、大学教育における生成系AIの活用の現状を知り、これからの活用の可能性を考えるため、生成系AIの活用に造詣が深い



畠山 大有先生

畠山 大有先生（日本マイクロソフト株式会社 データ&クラウド AI アーキテクト 統括本部シニアクラウドソリューション アーキテクト、佐賀大学非常勤講師）をお招きし、授業や課題でのChatGPTの活用の実際や問題点についてご講演いただきました。100名を超える教職員の皆様にご参加をいただき、生成系AIに関する関連な議論が行われました。

畠山先生には、技術者の観点から簡単にChatGPTが文章を作成する仕組みをご説明いただき、実際の授業でChatGPTを活用してどのようなことができるのか、メールや配布資料のドラフト作成、最新の教育関連情報収集、PDFの要約など多様な使い方の例をBingチャットを用いたものも併せて見せていただきました。

生成系AIの新たな使用方法として、ChatGPTやBingチャットを用いた会議の方法が示されました。「あなたは専門家1、専門家2、専門家3、専門家4、専門家5の役割を持っています。今からトピックについて交互に発言させ課題と解決方法を混ぜながら水平思考を使い議論してください。議論とは他者の発言に対して考察し、より発展させる為の意見を述べることです。（以下省略）」とプロンプトを入力します。すると、従来の会議で長時間を要していた戦略の策定や課題の検討、リスク分析が、多角的な視点からの意見を交えながら、わずか10分程度で完成するという利点が明らかにされました。

続いて、学習活動との関連性や成績評価への影響や個人情報の流出な

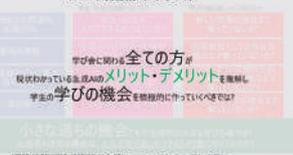
ど教職員が新技術に対して抱く不確かな懸念と対比した形で、過度に恐れて使用を制限することで学生が「生成系AIを知る機会」や「知財について学ぶ機会」を奪ってしまうという学習機会損失のリスクを提示されました。それらを踏まえて、生成系AIに対する理解を深めることが肝要であると強調され、メリットとデメリットを教職員が適切に把握することの重要性が語られました。そして、これらの認識を基に、学生たちの学びの場を積極的に創出し、充実させることの大切さが述べられました。このアプローチにより、新しいテクノロジーを教育の質の向上に結びつける道筋が示されました。

講演終了後、参加者より寄せられた多岐にわたる質問への回答が行われました。例えば、生成系AIを活用する際の学生のレポートにおける引用文献の記載方法に関する質問に対し、畠山先生は、従来の参考文献と同様の方法での出典記述を実施し、これを怠る者には減点措置をとっていると説明されました。また、「ChatGPTから適切な回答を得るための効率的な問かけ方は？」という問いに対しては、はじめに全体の概要を提示した上で、段階的に深掘りし、簡潔な問いを投げかけることで回答の精度が向上するとの見解を示されました。

このように秋学期FDプログラムにおいては、畠山先生から教育者として、また技術者として沢山の参考資料と新しいプロンプトを参加者に共有いただきました。引き続き大学教育開発・支援センターでは、立教大学の教育課題についてセミナーやFDプログラムで発信を続けてまいります。ご登壇、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

※本記事の技術的な内容は2023年11月10日現在のものです。

2つの観点でのリスク



次ページ「第3回立教大学教育活動特別賞」受賞者へのインタビュー

当センターとメディアセンターからのお知らせ（本学教職員向け）

■ 動画「知識とスキルをアップデート『ChatGPT 基礎講座』—授業や課題での活用法—」

上記秋学期FDプログラムの動画を公開しました（本学教職員限定）。
https://spirit.rikkyo.ac.jp/cdshe/lecture/SitePages/fd_chatgpt_20231101.aspx

● 「生成系をはじめとするAIの利活用に関する情報」サイトのご案内

生成系等AIに関する情報を随時更新していますのでご利用ください（本学教職員限定）。
https://spirit.rikkyo.ac.jp/generative_ai/SitePages/index.aspx

● 授業支援システム Canvas LMSをご活用ください

操作方法はオンライン授業マニュアルサイトに掲載しています。
操作についてご不明点がございましたらメディアセンターヘルプデスクまでお問合せください。
https://helpdesk.rikkyo.ac.jp/canvaslms_tea



第3回立教大学教育活動特別賞 受賞者インタビュー

立教大学教育活動特別賞は、教育内容や教育方法の工夫・改善により顕著な教育成果をあげた教員の功績を大学として顕彰する制度です。本号では、授業改善のヒントを得ることを目的として、受賞対象となった担当科目の授業規模を踏まえ、少人数科目からは社会情報教育研究センターの池田岳大先生、大人数科目からは兼任講師の小平健太先生に、授業設計に基づいた教育方法の工夫の観点からお話を伺い、お二人の先生の優れた授業実践の事例を学内外に共有・発信したいと思います。

「授業設計に基づいた教育方法の工夫 —授業改善のヒントを得るために—」

◆池田 岳大先生 (社会情報教育研究センター助教)
担当科目「社会調査法」(法学部法学科1年次生:履修者39名)

◆小平 健太先生 (兼任講師)
担当科目「哲学への扉」(全学共通科目総合系科目:履修者270名)

司会

◆野澤 正充先生 (法学部教授、大学教育開発・支援センター員)

授業のねらい

野澤：今回、特別賞を受賞された授業、池田先生は「社会調査法」、小平先生は「哲学への扉」ですが、それぞれの目標と内容について教えてください。

池田：授業の目標は、社会調査法が世の中でどう活用されているのか、もしくは法学部の学びの中でも、社会調査法で学ぶことがどう活かされているのかということを理解することです。

授業の内容について言うと、一つは、身近にあふれている社会調査法のデータなどをどう読み解くのか、もしくは社会調査データをどのように設計するのかという部分の基礎的な、どの学部でも共通理解として知っておいて困らない内容について、幅広く説明を行っています。もう一つは、なるべく常識を疑うような視点を授業で身に付けるということをテーマとして掲げています。

小平：目標については、学生一人ひとりが自分の問いを立てるということ。問いを立ててその問いに対してグループみんなで考えるという目標に向かって授業を行いました。

授業の内容に関しては、哲学や哲学史に関する知識を身に付けるというのではなく、実際に一人ひとりが哲学することを実践するという授業になります。



野澤 正充先生

野澤：一コマ 100 分の授業設計、および、学期の講義全体の設計を考えると、受講者の人数に応じて意識的に変えていることはありますか。また、準備等においても、大人数授業か少人数授業かで変えているところはありますか。

小平：資料の作成においては、人数によって大きく変わることはない気がします。一方、授業のやり方となると、形式が変わ

ります。演習科目やゼミ科目など 10 人以内の場合ですと、直接やりとりができるので一人ひとりの問いを拾いやすいため、次につながるようなアドバイスが直接できます。一方、大きい規模の人数になると、フォローアップはどうしても難しくなります。



小平 健太先生

そこで、大人数の授業の場合でも、リアクションペーパーの中で「授業を聞いて、皆さんだったらどんな問いが立てられると思いますか」という質問に回答してもらいます。その回答を授業の最初に共有します。すると、どうやら自分とは違う問いを立てている人間がこのクラスの中にはたくさんいるらしいというように、学生が誰かの問題ではなくて、自分の問題として引き受け始めます。このように少人数と大人数では形式を変えて、問いやリアクションペーパーの内容を共有するというようなことをやっています。

池田：私は、大人数の場合は、少人数の時よりもメリハリをつけるように気を付けています。特に 1 時限や 3 時限の授業は眠くなる可能性が高いため、何かの統計データを見せながら「このランキングの 1 位はどこ国でしょうか?」「このデータで、日本は何 % でしょうか?」といったことをオープンチャットを使いながら回答させたりして、大人数授業への参加を促すように工夫しています。重要なところは特にピックアップするなどして、なるべくだらだら話さないように心掛けています。

授業の方法について

野澤：小平先生の授業では、「毎回の授業で少人数のグループを作り、対話を行ってもらおう」とシラバスにありますが、どのような手順で行われているのですか。また、この授業を通して、学生にどのような能力を身に付けさせたいとお考えですか。

小平：まず、毎回の授業の初めに、15 分くらい各グループで前

回のような話し合いがなされたかを紹介して共有します。そのあと、本日の対話にうつりますが、まずアイスブレイク³⁾として質問ゲームをおこなって緊張をほぐします。対話のきっかけとして、本日のテーマについて事前に募集したみんなの問いをスライドにまとめて提示し、多数決でその日の対話のテーマを決め対話をはじめます。グループ分けは、Excel で学生番号に乱数を付けて、ランダムで並べ替えるというのを毎回やっています。対話の進行は各グループによって変わるので、むしろ私がこういう内容を話してくださいということは一切言わないです。

自分で問いを立てることと同じくらいに重視していることは、自由に考えることです。実は他者と一緒に考えるということが、自由に考えるためにすごく大事なんです。自分とは違う問いを立てる人がいること、自分とは違う考え方をしている人がいることを知ると、自由に考えられるようになります。自由な問いを立て、自由に考える力を身に付けさせることを意識しました。

もう一つは聞くこと。哲学対話を通して、実は自分の話をするよりも、他人の話を聞くことのほうがよほど難しいということをもみんな実感すると思います。相手の発言に対して自分はどんな質問ができるか、どんな問いが立てられるのかを考えるためには、聞くことがとても大事です。話す力よりも聞く力を養い身に付けてほしいということも大事にしていた部分です。

野澤：池田先生は、学生の思考を活性化するために、どのような工夫をされていますか。また、社会調査について、様々な例を挙げて講義を展開されていると伺っていますが、具体的にはどのような例を挙げていますか。

池田：社会調査法については、まず「誰に調査するのか」、「何を調査するのか」、「どのように調査するのか」と大きく3点に絞って調査しています。1点目の「誰に調査するのか」という部分では、無作為に調査対象者を集めてくることの重要性について学びます。2点目の「何を調査するか」については、学術的にどう調査が重要なのか、商業的にあるいは企業など民間で調査するときにはどういう点を重視して調査するのかという内容の部分が重要になります。3点目の「どのように調査するのか」については、調査票の設計の話になります。質問文のワーディングの問題や、選択肢の作り方など、悪い事例と改善点を示しながらより良い調査票を作成するための実践的な学びに近い内容です。

もう一つ海外の大学の授業の事例を参考に、直感的に講義内容を理解してもらえそうな工夫をしています。いわゆるランダムサンプリングの重要性を理解するときに、ビーチボールのような地球儀を学生に投げて、指で突かせるんですよ。そのときに、指で突いたところが海か陸かを覚えさせて、そのあと地球儀の海の部分を突いたか、陸の部分を突いたか手を挙げさせ、それが大体8対2ぐらいになれば、実際の海対陸の比に近いという結果になります。これがランダムサンプリングのイメージなんだということを伝えると、学生にも結構楽しんでもらえます。

具体例に関しては、社会調査法を説明する際に、調理を例に挙げることがあります。例えば、カレーを作るということを見ると、カレーを煮込んだり調理したりという、いわゆる料理人としての腕だけではなくて、素材の集め方の部分が大事になってきます。要するに、社会調査法の重要性は、素材の集め方とか、素材をどうやって見つけてくるかという部分であることを強調して授業を進めています。

野澤：ありがとうございます。次に教材開発において、学生の学修への主体的な参加を促し、モチベーションを高めるための工夫やアイデア、また、ご苦労されている点がありましたらお聞かせください。

小平：対話も、自由にやってもらうのですが、グループごとに進行役のファシリテーターをランダムに設定します。その学生次第で対話の方向はどこにでも行くのですが、オープンエンドというのがとても大事だということは、ちゃんと伝えていています。それこそ、好きになるとは何かとか、働くとは何かという問いの答えは本当は一つに決まらないと思います。もし答えが一つに決まってしまう場合、その対話は、実は怪しいです。例えば、働く目的について考えたときに、みんな一緒というのはあり得ない。常に問いを広げていき、問の答えが分からないときのもやや感を増やすことが対話の目的なのです。

池田：主体的な参加を促すために、身近にありふれている統計データを扱うようにしています。そして、そのデータを社会調査法などの学術的な観点から考えると、今まで見えてこなかった見え方ができ



るということに気づかせることが大切であると考えています。例えば、地域魅力度ランキング調査などです。ランダムサンプリングに近い形で調査をしているので、統計学にはしっかりした調査なのですが、東京や神奈川のような人口規模の多いところの意見に全体の結果が左右されてしまい、相対的にいわゆる北関東が低いランクになってしまいます。このように、身近にあふれているランキングのデータや、見覚えがあるようなデータをどう読み解くかを意識して授業をしています。

また、1年生向けの授業なので、あまり専門的な内容に入り込みすぎないように注意し、説明の方法を二段階に分けて分かりやすく行っています。一段階目では、直観的な理解を促すように具体的なイメージを簡単な言葉で理解させ、二段階目でもう少し抽象的で詳細な説明を行うことで、具体から抽象への理解を促すことが、自分の工夫になるかと思っています。

ICTの授業への活用について

野澤：先ほど、オープンチャットというお話が出ていましたが、ICTの活用について、どのような工夫や取組みをされていますか。

池田：私は、LINEのオープンチャットのような形のものを使ってやりとりをしているぐらいです。

小平：私は、前回の授業のリアクションペーパーの紹介、アイスブレイクのテーマや今日の対話のテーマの提示など授業の進行にパワーポイントを使っています。あとはLMSを使って、座席表や資料の配布を行っているぐらいですね。

野澤：ありがとうございます。それでは、生成系AIの学生の使用については、どのように対応されていますか。学生に注意事項など伝えていたことがありましたらお聞かせください。

池田：毎回の課題等に取り組ませる際、学生が生成系 AI を使用すると文章の癖があるので分かります。私の授業では、生成系 AI の使用を禁止してはいませんが、ただそれらを使った文章は明らかに違和感があるということだけは学生に伝えています。例えば先程の「社会調査法」での課題の話で言いますと、「提示された質問文の問題点について考えた場合、このような質問文のほうがよりいいのではないか」というようなことを生成系 AI に読み込ませると、専門用語の使い方がかなりちぐはぐだったり、ずれていたりということがあります。授業で明らかに触れておらず、レジュメにも書いてないことを学生が書いてきたりすると、その文章に違和感を覚えることがあります。

小平：他の哲学系の授業科目等でも、レポートを提出させることが多いのですが、生成系 AI を使用したかどうかはすぐ分かります。実は、私は、学生が生成系 AI を使うことにネガティブな印象は持っていません。生成系 AI を使った場合は、使ったものに対して自分がどう考えるかを書くというふうに活用するのは、よいと思っています。

私のレポート課題では、自分で立てた問いに自分でどのように考えたかが書かれていることのほうが大事なので、その点で、どんな問いが立てられるのかを検証する、自分の立てた問いと違う問いを比較するという形で ChatGPT などを活用するのはよいと思っています。

教育活動について



インタビューの様子

野澤：では、最後に、お二人にお聞きしたいのですが、教育活動としてどのようなことを大切にされていますか。

小平：繰り返しのなってしまいますが、私の場合は問題を与えるのではなく、自分で問題をつくってほしいと思っています。大学の教育の中では、必ずしも社会にとっての答えや一般論としての正義みたいなものではなく、自分の持っている関心を問いにして問題を自分でつくってみること、その答えも自分で用意していいんだと気づくことがすごく大事だと思っています。もちろん自分で立てた問いに対して、出た答えを導く思考がきちんと論理的に考えられていないとかが、論理が破綻しているとかあれば、教員が助けるべきだとは思いますが、学生一人ひとりが自分で問いを立ててみて、自分なりの答えを自分で用意してみるということをさせています。

そのときに、その行為は必ずしも、研究と私生活の分離の中にあるのではなく、自分が日々生きている中で見つけた小さな関心とか小さな問いは、実は哲学的な問いであったり美学的な問いであったり、色々な部分で研究とつながっていることを、実感してほしいと思っています。

そのためには、やはり自由に考えるということも大事で、自由に考えるためには、まずは他者が必要で、実は他者がいることによって初めて自由になる。教育上で今大切にしていることは、他者と共に考えることで自由に問いを立てて、自由に自分の考えを提示してみるということです。

池田：自分の授業が、学生の主体的な学びに誘導するきっかけになるように意識しています。自分が学生時代に躓きがちなところや、もうちょっと咀嚼して話してもらいたかったところ、こういう授業があったら面白かった・役に立ったという部分、さらに、1年生の間にこういうことを学びたかったと思う部分をピックアップして話すようにしています。

具体的にいうと、1年生の基礎づくりとして、身に付けておきたいレポート作成のコツなどです。高い点数がもらえるレポートや先生から評価されるレポートを書くためにはどうするか、もしくは先生はどのような部分を評価してレポートに点数を付けているのかという部分を、いくつかピックアップして、文章の構成の仕方とか、レポートを仕上げるためのノウハウのような部分を教えます。なるべくその後の学生生活にも活用できるような部分を意識して授業づくりをするようにしています。

必ずしも社会調査や統計学に興味がない人にも役に立つようなエッセンスや、他のこういう授業にも活かされる部分をなるべく幅広く押さえられるように意識して授業を行っています。

野澤：本日お二人のお話を伺って、とても参考になりました。やはり、お二人とも、事前にかなり準備をされて、学生の参加型授業を実践されています。このインタビューを通して伺った内容が、多くの先生方に伝わり、授業を改善されるときヒントになれば、と期待しております。本日はありがとうございました。

注) 雑談や簡単なゲームを入れるなどして場の雰囲気を換え、話し合いなどの協働作業がしやすい環境をつくること。

座談会まとめ：助教 神田 恵美子

編 今号では、第3回立教大学教育活動特別賞を受賞された先生方の中から担当科目の授業規模を踏まえてお二人の先生に、授業での工夫やご自身の教育に対するお考えを伺いました。授業の工夫は、学生の関心や意欲に繋がっていくと改めて実感しました。また、秋学期FDプログラムでは「ChatGPT基礎講座」を実施し、講師の畠山先生に実際の授業や課題での活用法を紹介していただきました。今後も教育活動の改善のヒントとなる情報を発信していきたいと思ひます。 (神田)

「MOVE 第31号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニュースレター

2024年3月8日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4624 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp



<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>